

Title	南北朝時代古鈔本『論語集解』の研究：台北故宮博物院所蔵楊守敬觀海堂本について
Sub Title	A study of "Lun yu ji jie (論語集解)" copied in Nanbokucho (南北朝) period : meaning of text belong to text owned by Yang shou jing (楊守敬) Guang hai tang (觀海堂) in The National Palace Museum of Taiwan (台湾)
Author	高橋, 智(Takahashi, Satoshi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2016
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.111, (2016. 12) ,p.37 (168)- 46 (159)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	関根謙教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01110001-0037

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

南北朝時代古鈔本『論語集解』の研究

— 台北故宮博物院所藏楊守敬觀海堂本について —

高橋
智

一、序言

二、日本南北朝時代鈔本『論語集解』の現状

三、楊氏觀海堂旧藏本

一、序言

日本に於ける南北朝時代は、歴史区分からは建武三年（延元一年・一三三六）から明德三年（元中九年・一三九二）を指すが、古鈔本の書誌学的時代から見るときは、だいたい元徳の一三〇〇年前後から、応永にいたるまでというとらえ方で、前の鎌倉時代とあとの室町時代との境界にやや曖昧なところがある。それは、この時代の古鈔本で遺されているものが数少ないということがその主因であるが、古鈔本の風格や書写の体式などからその時代の特徴を探っていくときには、南北朝時代の古鈔本という位置付けが適当であると思われる一群のものが存在していることが明らかとなっている。

それは、拙論『室町時代古鈔本『論語集解』の研究』（汲古書院・平成二十年）のなかで、『論語集解』の日本に於ける古鈔本が南北朝時代以前と、それ以後、すなわち室町時代（十四世紀末から十六世紀半ばころ）のものとは大きな隔たりが

あることをもとに、古鈔本に於ける南北朝時代とは、およそ十四世紀初頭から末にかけての書写本を指すことを論じ、その隔たりともいえる要因が、時代の流れとともに、『論語集解』をとりまく周辺の鈔本や出版事情の変化にあることも論じた。全体の現況を俯瞰してみると、『論語集解』の古鈔本は、平安時代以前に遡るものについては推し量ることができない。

鎌倉時代に、明経博士、中原家・清原家が用いていた古鈔本の現存が確認されるのが最古のものと見られている。そのうち、中原家は、もともと一具であった醍醐寺藏本と東洋文庫藏本、それに高山寺に伝わったものが存し、清原家本については、京都大学附属図書館藏本（単経本、清原良枝鈔本）・宮内庁書陵部藏本（嘉暦二・三、一三二七・八年鈔本）・東洋文庫藏本（正和四、一三一五年鈔本）・大東急記念文庫藏本（建武四、一三三七・清原頼元手校識語鈔本）が存し、他に、清原家本と思われる伝本が、公益財団法人武田科学振興財団杏雨書屋、名古屋蓬左文庫（元応二、一三二〇年鈔本）、大谷大学図書館（徳治三、一三〇八年鈔本）に所蔵されている。そしてこれらの清家本が主体となつて、次第に転写校訂が加えられるようになって、鎌倉時代から南北朝時代にかけて、少しく変遷を遂げていくのであるが、書写者や書風から、明らかに鎌倉時代とは区別できるものをまとめて、南北朝期のもつとして分別することとしたのである。武内義雄博士『論語之研究』（岩波書店・昭和十四年）の『本邦旧鈔本論語の二系統』（「正平版論語源流攷」（大阪府立図書館・昭和八年）からの抜粋）を参照。

南北朝時代は、確たる博士家の証を有する古鈔本もあるが、博士家の証本と断定はできない古鈔本が幾つかを存し、論語読習の流布の一端を示している。その後、古鈔本は十五世紀頃にあつて伝本を幾つか見るに止め、室町時代十六世紀には、清原家の中興も相俟つて、古鈔本の現存は多くなる。そして、正平十九年（一三六四）には堺で所謂正平版『論語集解』が初めて上梓され、現存するだけでも双跋本二種・単跋本・明応覆刻版と四種の版が確認されて、古鈔本の世界にも大きな影響をもたらしたのであった。

二、日本南北朝時代鈔本『論語集解』の現状

現在、知られている南北朝期古鈔本と識別されるものは以下の通りである。ただし、一・三・七については全卷揃いの完本であるが、それ以外のものは欠損のある不全本である。

一、公益財団法人東洋文庫蔵	貞和三年（一三四七）	藤宗重跋鈔本	十冊	
二、愛知県一宮市木村家蔵	元徳三年（一三三一）	虎関師鍊写	四軸	重要文化財指定品
三、台湾台北故宮博物院蔵	観応一年（一三五〇）	鈔本 楊守敬旧蔵	四帖	
四、猿投神社蔵	康安二年（一三六二）	鈔本	三軸	重要文化財指定品
五、同蔵	南北朝期鈔本		一軸	重要文化財指定品
六、同蔵	南北朝室町初期鈔本		一軸	重要文化財指定品
七、某家蔵	南北朝期鈔本	島田翰旧蔵	十冊	

このように、南北朝時代の書写に係る『論語集解』伝本には貞和三年（一三四七）の識語を有する東洋文庫所蔵本を始めとして、数本を数えるに過ぎないが、南北朝時代は『論語集解』古鈔本が鎌倉時代の遺風を受け継ぎ、テキスト上、最上の位置を保った時代であったといつて過言ではないであろう。また、室町時代古鈔本との比較でいえば、正平十九年（一三六四）に出版された正平版『論語』以前の姿を遺すもので、正平版の影響を色濃く受けた室町時代の産物とは当然一線を画すものとみてとれるのである。この期の鈔本を明らかに捉えることによって、正平版を境とした、日本に於ける『論語集解』受容の変化の歴史を概観することができるのである。

猿投神社（さなげじんじや・愛知県豊田市）蔵本（三本）は、昭和四十年、国の重要文化財に指定された一連の猿投本漢

籍古鈔本類（『古文孝経』『春秋経伝集解』『論語集解』『史記集解』『帝範』『臣軌』『文選』『白氏文集』）に含まれるものである。昭和三十九年に慶應義塾大学附属研究所斯道文庫阿部隆一教授が調査を行い、同じ頃、国学院大学の村田正志氏が『猿投神社主要宝物目録』を編纂し公となったものである。

三種類の鈔本は、惜しくも現存は全体の十分の一ほどである。その由来などの詳細は明かでないが古式の書写風格は伝来の奥ゆかしさを十二分に醸し出している。拙論『南北朝時代古鈔本『論語集解』の研究―猿投神社所蔵本の意義―』（斯道文庫論集第四十三輯 平成二十一年）を参照。

観応本は、元卷子装を改装して帖装にしたもので、五種類の手による寄合書きである。明治時代、楊守敬が来日した折に購得し持ち帰ったものである。

木村家本は、計四軸を存するが、巻第五―六の第三軸目を欠損している。全巻一筆で、「江家」「家本」等多数の異本と校合する書き入れも本文同筆と思われる。清原家の点、清原家の本奥書も具え、元徳三年の虎関師鍊の奥書を存する極めて価値ある現存本である。本書については後稿に譲る。

三、楊氏観海堂旧蔵本

本書は南北朝期の書風を、形態的によく醸し出している古鈔本で、幾筆かの手を合わせた寄り合い書きであるが、現存するこの時期の写本のなかでも上乘と言える。台北故宫博物院に収蔵される楊守敬（一八三九―一九一五）蒐集の室町時代古鈔本『論語集解』については、既に「台湾故宫博物院所蔵 楊守敬観海堂旧蔵 室町時代鈔本『論語集解』について」（『斯道文庫論集』第四十一輯・平成十八年）に詳しく述べた。楊氏は、一八八〇年（清光緒六年・明治十三年）に来日し、一八八四年の帰国まで、書誌学者森立之（一八〇七―一八八五）との交流を通じて、当時の日本所在善本書目『経籍訪古志』に所載の古鈔本を購得し、とりわけ『論語集解』の蒐集には意を注ぎ、その力を尽くした『論語』（総て十一點）蒐集の白眉と為すべきものが本書である。楊氏は帰国後、日本に於ける蒐集の唐本（中国刊本）は、ほぼ他家に譲渡したが、室町時代

以前の日本古鈔本に就いては、各書に七十歳の自像写真を貼附してこれを珍藏した。本書にも、他と同様に、藏書印を捺し、第一冊の首に「楊印／守敬」（陰刻）、「宜都／楊氏藏／書記」（陰刻）、各冊の首に「飛青／閣藏／書印」（陰刻）、「星吾海／外訪得／秘笈」（陽刻）の朱印がある。

『経籍訪古志』には多く『論語』古鈔本を挙げているが、本書はそのうちでも最も古いものの一つとなっている。楊守敬自身も『日本訪書志』巻二のなかで、唐以前の旧本の姿を伝えているものと絶賛している。

『経籍訪古志』第三稿本以下光緒十一年（一八八五）刊本では、

「旧鈔本卷子改摺本 某氏藏／・・・按此本卷首至雍也体式一與諸卷子古本同、実為六朝旧本転伝之真、而述而以下蓋従宋時改竄本補鈔者、注中所引諸説但記其姓不及名、句末也乎已等字大半刪去、是其証也」

としている。雍也篇（第六・卷第三）までは、唐写本以前の姿を伝え、述而篇（第七・卷第四）以下は、何晏集解の注文に於いて「鄭玄曰」などの出拠人名を「鄭曰」などと省略に従っていることから、宋刊本以後の体式に拠っている、と指摘する。「也・乎・已」などの助字が少ないことも刊本以後の姿であることを物語っている。更には、「匡」字に欠筆が見られるのも宋刊本に拠っている証であろう、と。

実際に、正平版『論語』などは句末の助字の多いことが特徴であり、南北朝以前の写本に見られる特徴と、それは一致する。

しかし、これに対して楊守敬は『日本訪書志』の中で、述而篇以下も宋刊本に拠っているとは限らず、これも六朝に遺風を受け継ぐ鈔本だとして『経籍訪古志』の説に反駁している。『訪古志』の説は小嶋尚質（宝素・尚質は諱、嘉永一年（一八四八）没五十二歳、幕末の医家・書誌学者）の説に拠っている。小嶋氏の説は、楊氏によれば本書の里仁篇の末に題跋として加えられていたというが、その手跋は今佚している。確かに宋本は人名を省略することが多いが、南北朝のこの書写者は当時常見の宋版の習慣に習っただけで、それは書写者の随意であって、拠るテキストの本質には関わりないとする。

「匡」「桓」などの字の欠筆については、宋版に常見の欠筆があり、日本の古写本にはその宋版の習慣をただ模倣して書写者

が欠筆する例が多いこと、また人名の省略と同じ現象であると指摘する。

『訪古志』に引く説は、「倭宋」と称した小嶋氏ならではのものであるが、対して、これほどの短期間に日本の古写本の特性に習熟した楊氏の眼力もまた、端倪すべからざるものがある。

さて、こうした論争を念頭に置きながら、この写本を綿密に調査してみることとする。

論語十卷 魏何晏集解〔南北朝〕写〔寄合〕

観応一年（一二三〇）豪俊奥書 卷子本改裝四帖（000004～000007）

室町期の縹色古表紙（縦二十六・一×横十九・八糎）で覆った厚手の表紙に仕立てる。第三・四冊は縦二十五・五糎とやや小さい。この縹色の表紙は、斯道文庫藏室町中期写本（青蓮院本・0922）や都立中央図書館藏室町中期写本（青淵）のものに近似する。毎冊の表紙の右に「盈」と墨書。裏左下に「三十八」と墨書する。各冊に題簽を貼る。題簽は茶色の厚手斐紙で、「論語集解 元（亨利貞）」と墨書する。この筆跡は室町期のものであろうか。見返しは表紙の裏となり、金色花紋の紙を当てる。そこに、第一冊目のみに、楊氏の写真を貼り、「星吾七／十歳小像」（陽刻）「楊印／守敬」（陰刻）の印を捺す。要するに、もと卷子本であったものを折りたたんで四帖とし、表紙を当てたもので、背は綴じない。経折装のようになる。上下に裁断される。本紙は総裏打ちが施され、江戸時代から明治時代にかけての新しい装潢である。第四冊の後表紙内側に「中華民國七十九／年度点驗之章」「教育部／点驗之章」二印を捺す。

首に何晏の「論語序」がある。そこに「楊印／守敬」（見返しの写真と同じ印）「宜都／楊氏藏／書記」（陰刻）「飛青／閣藏／書印」（陰刻）「星吾海／外訪得／秘笈」（陽刻）の印を捺す。後者の二印は第二冊目以降各冊に捺されているものである。

巻頭は、

論語学而第一 何晏集解 凡十六章

子曰学而時習之不亦悦乎 馬融曰／子者男

と題し、「馬融」以下の注文は小字双行。泰伯篇第八（卷第四）・顔淵篇第十二（卷第六）は同様に作る。ただし、述而篇（卷第四）以下は次のように作る。

論語卷第四

述而第七 凡三十八章 何晏集解

子曰述而不作信好古竊比於我

このうち、憲問篇第十四（卷第七）・季氏第十六（卷第八）・微子第十八（卷第九）は、「何晏集解」四字を記さない。

この例に漏れるものとして、

鄉党第十 凡一章 朱分為十七節

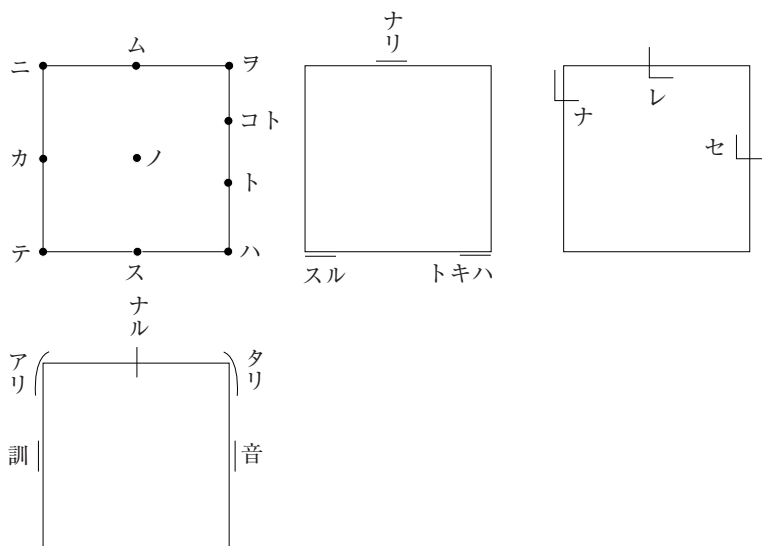
子張第十九 何晏集解

堯曰第二十

の三篇がある。このように首題のあり方は、室町時代以降、正平版『論語』の系統に属する写本は、章数を下部に置き、博士家系統に属する写本は、章数を篇第の次に置くことが知られているが、この写本はそれが混在しているのであつて、これはまた、小嶋氏が言うところの唐写本系と宋版系が本書に混在しているという言説にも符合するものである。

その体式は、もともと卷子装であつたものを、折り曲げて改裝しているが、おおよそその料紙は一紙十五行、または十四行で長さは約四十二・五糎（十四行のものは三十九・五糎）、墨界を施し、各行の幅は約二・八糎、界の高さは約二十一・九糎というものである。各巻の首葉は一紙十三行または十一行に作る。中途や巻末にまます数行分の料紙を用いる箇所もある。第一帖には、「序」「卷一・二」を収め、全部で元の二十五紙を折帖に改裝した。同様に、第二帖は「卷三・四・五」を収め、四十二紙分、第三帖は「卷六・七」を収め、三十五紙分、第四帖は、「卷八・九・十」を収め、三十七紙分をそれ

ヲコト点図



ぞれ折帖に改装している。末尾の奥書は七行一紙として加えたものである。書写に当たっては、先ず紙を継いでから墨書している。料紙は上質の厚手の斐紙である。

それぞれの筆跡を分析すると、五手に分かれ、A…卷一、五（序・学而篇、郷党篇）B…卷六（先進篇・顔淵篇）C…卷七・九（子路篇・憲問篇・陽貨篇・微子篇）D…卷八（衛靈公篇・季子篇）E…卷十・奥書（子張篇・堯曰篇）に分類される。

A手は柔軟で佳筆、B手は鎌倉期の遺風を感じる佳筆、C手はやや硬さを感じさせる。D手は伸びのあるこれも佳筆、E手はこじんまりとした小振りの筆跡である。しかし、皆、同時代の手に係り、同質の料紙に濃重な墨痕を浮き出している。

本文への書き入れは、墨筆による返点・送仮名・縦点・附訓・声点で、本文書写と同時期のものと思われ、全巻を通じて同じ手で加えられている。附訓は抄物の「ゾ式」によるところも見られる。この筆跡と同時代と思われる薄墨による附訓も見られる。更に明らかに時代の降る細字の墨筆附訓も見える。また、朱筆による句読点・返点・附訓・送仮名も見られるが、これも本文と同じ時代のものと推察する。更にその

朱筆でヲコト点加えられているが、ここに点図を示しておく。

尾題は、「論語卷第一 經一千四百七十字／注一千五百一十五字」「論語卷第二 經一千二百一十二字／注一千九百三十一字」「論語卷第三 經一千七百一十一字／注二千八百二十字」「論語卷第四 經一千五百十四字／注二千三百七十七字」「論語卷第五 經一千四百六十二字／注二千二百九十七字」「論語卷第六」「論語卷第八 經一千七百七十四字／注一千九百七十字」「論語卷第九」「論語卷第十 經一千二百二十三字／注一千百七十五字」となっている。卷第七は尾題を欠いているが、卷六・九以外には、皆尾題の下に双行で經注字数を加えている。ただし、卷第四・五・八・十の字数は、尾題と別筆で、本文書入れの手と同じ筆跡で書き加えたものである。南北朝期の写本にもおしなべて「經注字数」は記されているが、室町時代以降の古写本においても、助字を削去したり、注文に省略があつたりしても、この字数は一貫して同じ数字で通されているのは興味深く、テキストの校訂に関わらず古く伝わった数字を踏襲しているのである。經注字数は宋刊本の特徴と言われるが、楊氏の言う如く、欠筆や姓名の省略などと同じく、古写本の書写者が宋刊本の常習に倣つたものとも考えられるが、結論は難しい。

卷第十の後に本文書写者（E手）の書写奥書がある。

観応元年五月廿二日非夫人之為／書而誰為書柳下惠則可吾／則不可／ 本住院権律師豪俊書

観応元年は一二三〇年、北朝の年号である。最古版の正平版『論語』の正平が南朝の年号であるのに対して、南北朝写本『論語』は、元徳三年（一二三二）貞和三年（一二四七）康安二年（一二六二）と皆、北朝の年号を用いているのは興味深い事実である。柳下惠は古代の賢人で、伯夷叔斉の潔白とも違い、衆人のなかに居て人から恥辱を受けることに甘んじても言動は筋道があり思慮深い人であつた。孔子が遺逸の民の一人として挙げる。『論語』衛靈公篇・微子篇、『孟子』公孫丑上篇・万章下篇・尽心上篇下篇に見える。豪俊については不詳。

更に第四帖後表紙見返しに、次の安永三年（一七七四）の識語がある。無論、本文書写とは無関係な後人の所持者（性

譽)の感得語である。

從觀応元年安永三年午年迄凡四百二十五年也 七月廿二日改之／性譽代法瑞伝者也

以上のような体式上の性格を備えた古鈔本であるが、拙論『南北朝時代古鈔本『論語集解』の研究―猿投神社所蔵本の意義―』(斯道文庫論集第四十三輯 平成二十一年)のなかで述べた如く、この觀応本も猿投神社所蔵の康安本に字句の異同は類似している。更に、例えば、公治長篇第二十六章「少者懷之」の注「孔安国曰懷安也」の一文を見ると、南北朝以前の鈔本は皆、この如くであるが、通行本は「懷婦也」としている。正平版以下はこの句が削去されていくが、本書が古い鈔本の系統に連なっていることを十分に物語っている。重ねて申し上げるが、『論語』古鈔本は、正平版の出現によって、少しく姿を変えていくのであって、南北朝鈔本は正平版以前の古風をとどめた重要な位置に立っていることを、この鈔本の解説を通じて強調したい。